



稲作情報第1号

（育苗と施肥）

令和7年3月7日～

令和7年3月23日

JA夢みなみ（すかがわ岩瀬地区・あぶくま石川地区）、県中農林事務所須賀川農業普及所

1 気象庁発表 東北地方3ヶ月予報

2月25日時点の3ヶ月予報では、気温は高くなる確率が50%で、平年より高くなる見込みです。

2 育苗準備

（1）種子の準備

令和6年度は、浸種中に根や芽が出る現象が多く見られました。浸種だけでなく、育苗期間中の温度管理に注意しましょう。

○塩水選：購入種子でも実施しましょう。使用する塩水の比重はうるち米で1.13、もち米で1.10です。

塩水選後は軽く流水ですすぎ、粳表面の塩水を落とします。

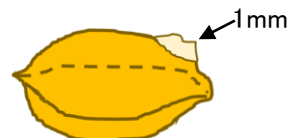
○種子消毒：もみ枯細菌病の被害が増えています。未消毒種子を使う際は、もみ枯細菌病に登録のあるテクリードCフロアブル等の薬剤を処理しましょう。

（2）浸種（種浸し）と催芽（芽出し）

○浸種：水温10～15℃で7～10日間、積算温度100～110℃（ひとめぼれは休眠が深いので120℃）で行います。水温がこれより高くても低くても発芽は不揃いになります。また、水温が低いと、種子消毒の効果も安定しないので注意しましょう。

水は粳の2倍以上の量を使い、3日目からは毎日交換しましょう。（エアレーション付き水槽などでも必ず交換してください）

○催芽：30℃以上で、もみ枯細菌病が発生しやすくなるため、設定温度は28℃としてください。（ハト胸催芽機を使用する場合も同様に28℃設定としてください）。ハト胸状態（芽の長さ1mm）になったら芽出しを終えてください。



【芽出し終了】
ハト胸状態

（3）播種（種まき）

○播種量：苗の種類に応じて適正な播種量としてください（表1）

表1 標準的な播種量と苗の種類別目標生育量

	播種量 （乾粳 g/箱）	育苗日数 （日）	草丈 （cm）	葉齢 （葉）	10a あたり箱数 （70 株植のとき）
稚苗	200	20～25	10～13	2.2～2.5	18～20
中苗	100	30～35	13～15	3.0～3.9	30～35
高密度播種移植栽培 （密苗・密播）	250～300 （催芽粳：312～375）	15～20	10～12	2.0～2.3	7～12 （50～60 株植）

密苗・密播のココに注意！

病害：1箱を大面積に植えるため、一部でも病害が出るとその影響が大きくなります。**育苗期間中の病害対策**を特に入念に行いましょう。

播種と覆土：田植え時に苗箱からかき取る量が小さいため、播種ムラがあると、田植え時に欠株になりやすくなります。**均一な播種と覆土**を行い、均一な苗作りを目指しましょう。

○育苗培土：培土の自家調製を行うときは、病害予防のため pH5.0 を目安にしてください。

○資材の殺菌：前年に苗立枯症状がひどかった場合、**農業資材用消毒剤（イチバン等）を使った育苗箱の消毒**を検討してください。

○アルミ蒸着被覆資材（太陽シート）の確認：アルミのはがれた部分は温度が上がり、高温障害の原因となります。事前に確認し、剥離部分は使用しないようにしましょう。

○ハウスのビニール：温暖化傾向により育苗中の高温障害やもみ枯細菌病が増えています。ビニールを新しくすると温度が上がりやすくなるので、高温対策として開口部を広くとるようにしてください。

(4) 育苗期の病害対策

- ・30℃以上の高温で、もみ枯細菌病や苗立枯病などが出やすくなります。
- ・5℃以下の低温で、ムレ苗や苗立枯病(ピシウム)が出やすくなります
- ・病気が発生した場合は、その種類を見極めて対処しましょう(表2)。
- ・もみ枯細菌病や苗立枯細菌病が発生した育苗箱は、ハウスから持ち出し処分してください。

温度管理に注意！

表2 水稻育苗期の病害と使用薬剤の例

病名	主な症状	多発条件	ダコレート 水和剤	タチガレエース M 液剤*	ダコニール 1000	ナエファイン フロアブル*
リゾーパス	白いカビ(覆土表面)	出芽期の高温	○		○	○
苗立枯病						
フザリウム	白やピンクのカビ (地際や籾)	緑化期の高温	○	○		○
ピシウム	カビは見えない。 ドーナツ状の枯れ	緑化期以降の 低温		○		○
トリコデルマ	緑のカビ (覆土表面、種籾周)	高温、多湿培土 pH が低い	○		覆土後の使用ができる	
細菌						
もみ枯細菌病	坪状に枯れ、心葉が 容易に抜ける。	高温多湿、 高 pH(6.0 以上)	覆土後に使用できる薬剤はないため、 <u>播種後覆土前</u> に 種籾の上からカスミン粒剤(15～20g/箱)を散布			
苗立枯細菌病	坪状に枯れ、基部が 白化。	高温				

* タチガレエース M 液剤とナエファインフロアブルは根の生育促進、移植時の活着促進効果も期待できます。

3 吸収抑制対策とほ場準備

過去にカリの上乗せ施用を行ったほ場でも、基肥以外のカリ供給を行わないと徐々に土壌中の交換性カリ含量が低下し、玄米中の放射性セシウム濃度が高まる恐れがあります。

令和7年産米も引き続き安全な米生産となるよう、交換性カリ含量が目標値 25mg/乾土 100g 以上となるよう塩化カリを施用したうえで、慣行の基肥を施用しましょう(表 4,5)。また、堆肥の施用も吸収抑制対策に効果的です。

表4 施用すべきカリウム量の目安

交換性カリの 土壌分析値 (mg/乾土 100g)	交換性カリの目標値 25mg を確保するた めに必要なカリ成分 量(成分量 kg/10a※)	左に相当する 塩化カリの施用量 (現物量 kg/10a)
5	30	50
10	23	38
15	15	25
20	8	13
25 以上	0	0

* 作土層を 15cm、土の仮比重を1と仮定した試算値

表5 標準的な施肥量の目安(成分 kg/10a)

品 種	窒 素		リン	カリ
	基肥	追肥	基肥	基肥
コシヒカリ	3～4	1.5～2	8	10
ひとめぼれ	6	2	7	8
チヨニシキ				
里山のつぶ	6～8			
天のつぶ				
ふくひびき	8	2～4		

4 その他

(1)倒伏対策

- 作土層の確保: 作土が浅いと、根張りが弱く倒伏しやすくなるため、15～20cm の作土層を確保しましょう。
- ケイ酸資材の施用: 稲体が硬く丈夫になることで、倒伏だけでなく、病害虫にも強くなります。

(2)本田の病害予防

- 紋 枯 病: 前年に発病した病斑上に形成した菌核がほ場に落下・越冬し、翌年の伝染源となります。発病が激しい場合、倒伏しやすくなります。プラウ耕や代かき時に風下・水尻・畦畔沿いにごみが寄りますが、これに紋枯病の原因菌が含まれているため、田植え前に必ずすくい取ってください。
- ごま葉枯病: 河川に隣接したり、砂質土壌等の肥料持ちの悪いほ場で発生しやすくなっています。多発したほ場については、翌年の田植前にほ場にケイカル(150kg/10a 以上)や転炉かすのいずれかを施用し、ケイ酸・鉄・マンガン・マグネシウムを補給してください。

県中農林事務所須賀川農業普及所 電話(0248)-75-2180	ご不明の点は、JA夢みなみ、須賀川農業普及所にお問い合わせください 次回の発行予定日は令和7年3月24日(月)です。
-------------------------------------	---

本資料は、発行日現在の農業登録情報を基に作成しています。農業使用の際は、最新情報を確認願います。